

第2回 THE シガパークビジョン検討委員会 議事概要

1. 開催日時：令和7年12月24日（火） 9：30～11：30

2. 開催場所：滋賀県危機管理センター

3. 出席者：上田 洋平（滋賀県立大学地域共生センター）委員
福井 亘（京都府立大学 生命環境科学研究科）委員
高木 浩文（公益財団法人 淡海環境保全財団）委員
辻 祥子（滋賀県シェアリングネイチャー協会）委員
廣瀬 香織（一般社団法人ママサポートコミュニティ）委員
岩寄 博論（武蔵野美術大学 造形構想学部）委員（Web）
宮本 麻里（合同会社 LOCO）委員（Web）

（敬称略）

4. 議事 (1) 開 会

(2) 議 題

第1回 THE シガパークビジョン検討委員会議事録について 資料-1

利用者等への公園に関する意見聴取結果について 資料-2

THE シガパークビジョンの方向性および骨子（素案）について 資料-3

(4) 閉 会

5. 議事内容

(1) 第1回 THE シガパークビジョン検討委員会議事録について

事務局より、第1回 THE シガパークビジョン検討委員会の議事録を説明（資料-1）。

(2) 利用者等への公園に関する意見聴取結果について

事務局より、利用者等への公園に関する意見聴取結果について説明（資料-2）。

<主な意見>

（委員）子どもの声調査結果は、公表してフィードバックしているということであるが、一般アンケートも結果はフィードバックする予定はあるか。

（事務局）分析した結果をビジョンに反映するが、アンケート結果は委員会資料を公表する形でフィードバックする。

（委員）アンケート結果は、今後も一般とマーケティングは合算して集計するのか。また、公園ごとの集計をする際は実数が少ないため県内外を合算しても良いだろう。

（事務局）一般は主に公園利用者、マーケティングは利用しない人の意見も取り入れるために実施した。分析を進めながら項目によって使い分けたい。

(委員) 自由意見は大変興味深い。公園を利用していない人は、公園に対する古い考えから脱却できておらず、こちら側もそれを発信できていない。これまでの公園は子供向けに偏っていたため子供が成長すると利用されなくなるといふ分析結果につながっている。マイナス点は対処療法的ではなく長い視点で補完してことが大切。

(事務局) ひとりひとりの意見から吸い上げるべきものもある。個々のコメントを活かしていきたい。テキストマイニングだけでは解釈が難しいため、人力での読み込みが不可欠であると考えている。

(委員) アンケート結果(速報)で県民の皆さんのニーズがある程度みえてきた。子育て世代は遊具利用が多く公園との関わりが多い。その後しばらく遠ざかり、50代くらいになると健康の視点も入ってくるため、今後、年代ごとにクロス集計すると、それぞれの特徴がみえてくるだろう。

(事務局) 今後、分析を進める。

(委員) THE シガパークの認知度として15%で満足せずに、この言葉を浸透させていくことで、県民が公園の新たな価値を考えるきっかけになるのであれば、認知度向上は非常に重要ではないか。

(事務局) 言葉の普及だけでなく、その言葉が「良い公園に行こう」と思わせるきっかけとなることを目指したい。また、今回の調査結果を初期値とし、5年後・10年後の推移を追跡する行政指標として利用していきたい。

(委員) アンケート結果をAIが分析すると、自然環境に関する評価が高いが、必ずしも生活に不可欠な存在とはなっていないようであり、存在する場所から行く場所へととなると良い。速報でもいろいろ見えてきているので分析を進めていただきたい。

(3) THE シガパークビジョンの方向性および骨子(素案)について

事務局より、THE シガパークビジョンの方向性および骨子(素案)について説明(資料-3)。

<主な意見>

(委員) ビジョンが20年、30年と続いていくためには、公園を日常的に利用する県民がどう関わっていけるかが鍵になる。現在のボランティア活動などは、活動を知っている一部の人に限られている。たまたま公園を訪れた人が関わられる仕組みや今日暇だから公園にこうと思える取組があったら良い。

(委員) 偶然訪れた場所での小さな関わりが次に繋がる可能性がある。誰に向けたビジョンなのか念頭に置いて考えるべきである。

(事務局) 検討したい。

(委員) 目次構成は通常のスタイルであり良いと思う。またシガパークというコンセ

プト自体は非常に良いが、「THE シガパーク」と「シガパーク(個別の公園)」が分けて記載されており、前者が「滋賀県全体を見立てた疑似的な公園」、後者が「実際の公園」と読めてしまうが、「THE シガパーク」の定義は、元々の定義「びわ湖を中心とした滋賀県が一つの大きな公園であるかのよう」に、すべての人の憩い・交流・体験の場となることを目指し、県の公園全体の魅力向上を図る取組です。」の方が明確である。

(委員) 「THE シガパーク」と「シガパーク」は、音声上わかりにくいので、個別の公園の呼び方を検討した方がよい。

(事務局) THE シガパークのことを略してシガパークと使ってしまう場合もあり、どちらを指しているか厳密には分からなくなる可能性が高い。「THE シガパーク」という概念は変更できないが、個別の公園の呼び方については検討していきたい。

(委員) 行動計画は単年度で考えられているが、計画期間中にも問題は必ず発生するため、それらに迅速に対応できるように計画に組み込んでおくべきである。また、文書で厳密に固めすぎると柔軟な対応が困難になるため、臨機応変に対応できる仕組み(余白)を設けるとよい。全体戦略があり、各公園の個別戦略が出てくるはずなのにそこが抜けているように感じる。全体戦略から個別戦略にどうつながっていくかを明記できるとよい。

(事務局) 検討したい。

(委員) 将来あるべき姿として「時代を超えた公園」と「20～30年後の公園の姿」の二本立てになっているが、この構造が非常に分かりにくい。「時代を超えた公園のあるべき姿」は抽象的な表現になると思うが、これを上位に置き、それを踏まえた上で具体的な20～30年後の姿を一本にまとめる方が分かりやすい。また、「トイレのリニューアル完了」や「協働による維持管理の実施」といった項目は、「将来あるべき姿」ではなく、具体的な数値目標も入れた「行動計画」に記載すべき内容である。

(委員) 計画の年限が短期(5年)、中期(20～30年)、長期(世代を超えて)の3つに分かれているが、それぞれの役割を明確にすることが望ましい。短期は具体的な施策に落とし込むべきである。中期・長期の役割については、達成可能かにかかわらず「あるべき理想像」を描き、そこからバックキャストして短期・中期のプランニングを行うという位置づけを明確にすべきである。

(委員) あるべき姿(ビジョン)は、「公園のトイレがきれいになっている」といった設備の話よりも、「その時点で県民が公園でどのように過ごしているか」といった利用者の姿を描くべきである。

(事務局) 行動計画には、現状の定性的な文章表現だけでなく、施設整備の進捗率のような数値目標や、計画のフォローアップが可能となる具体的な指標を盛り込んでいきたい。また、予算との兼ね合いはあるが、具体的な取り組みを記載していく方針である。

(委員)「ボランティア」という言葉は、特に若い世代にとっては捉え方が限定的になる傾向があるため、より包括的な「地域コミュニティ」というキーワードを用いることで、子育て支援団体や市民活動団体など、多様な主体が自分ごととして連携を考えやすくなる。また、地域コミュニティ側にも、活動フィールドの拡大や、環境活動・公園との連携といった新たなニーズがある。

(事務局)企業との連携については、ボランティア的な支援だけでなく、サービスを利用してもらう形での関わり方も考えられる。「地域コミュニティ」のように、従来のボランティアやサポーターといった言葉だけでなく、新しい関わり方を示す言葉が必要かもしれない。

(委員)一般の公園利用者が、計画の当事者であると感じられるような表現をロードマップに盛り込む必要がある。また、「将来あるべき姿」の項目は、あまり多くの文章を読まない子育て世代などにも伝わりやすい内容にすることが求められる。

(事務局)検討したい。

(委員)基本理念にある「美」と「優」と「楽」に加え、人が集う場所、あるいは人と人がつながる場所としての公営という役割があることから、滋賀で使われている「結(ゆい)」のような、人と人を結びつける概念を表すキーワードを盛り込んでどうか。

(委員)アンケートでも暑熱対策に関する意見があった。公園が利用者と環境の両方にとって「健やか」であるべきである。

(委員)ビジョンは、県としてどうしていきたいのかを明記することがポイントであり、今時点で答えはないので、目指すべき姿を県でしっかり提示し、それを図化していくことが大切。

(事務局)検討したい。

(委員)ビジョンの対象は、レジメにある都市公園をイメージさせる「県営公園」という表現より、自然公園もあるので「県が管理公園」と整理するのが適切である。市町が管理する公園を対象とするには、どこでこのビジョンをオーソライズするのかという問題があり、手続き上困難であるため、「情報共有」や「連携・協力」という形での関与が妥当である。

また、「対象分野」の表現が分かりにくいので、ハード・ソフト事業の区別や、他部局の施策との関連性について整理が必要である。

(事務局)対象分野の1点目は、DX導入や広報など、県が管理する公園を横断的に統合して実施する方が効率的な、ソフト事業をイメージしている。2点目は、健康づくりや観光、琵琶湖一周(ビワイチ)など、県その他施策と公園が関連する部分での連携を意図している。各計画との関係性(優先順位、法的効力など)の整理は、膨大な作業量と県庁内の調整を要するため、現在進行中である。市町との関わりについても、強制的に取り込むものではなく、共同で

事業を行う際の手続きなどを今後意見交換しながら具体化していく方針であり、現段階では大きな考え方のみを示している。

(委員) 滋賀県全体の人口推計だけでなく、人口動態が大きく異なる都市部と農村部(北部・南部など)の状況を分けて考える必要がある。民間活用は人口集積のある南部では有効だが、人口が少ない北部などでは困難な場合があり、そうした地域では行政が維持管理を担うべき。

(事務局) 県内でも地域によって人口動向は大きく異なるため、地域ごとの人口動態や特性を考慮して進めていきたい。

(委員) 公園分野以外の人が見ると伝わりにくい部分もあるので、巻末資料に事例を入れると良いだろう。

(事務局) 検討したい。

(委員) さきほど基本理念の部分で「結(ゆい)」と提案したが、健康しがの視点から見ると、「健やか」はキーワードかと思う。

(委員) 公園で「健やか」になること、一方で公園をどう「健やか」にしていくかの視点は重要である。また公園へのアクセスや自然に触れ合える場所である公園の生物多様性などについても配慮して案を作成して欲しい。

以上